

六 ランダウアー

クロボトキンを越えるランダウアー⁷⁾の歩みは、まず第一に国家の本質に対するその率直な洞察に存する。国家は、クロボトキンが考えるように、人が革命によって破壊することのできる制度ではない。「国家は一つの関係、人びとの間のある関係、人びとが互いにとる態度のある様式である。人は国家を破壊するには、いまと別の関係に入ることにより、互いにいまと別の態度をとることによってである。」人びとは現在互いに「国家的」関係、すなわち国家の強制秩序を必要とし、またそこに表現されているところの關係に立っている。したがってこの強制秩序は、ただ人びとの間のこの關係が別の關係にとって代えられる度合に応じてのみ克服されることのできる。この別の關係をランダウアーは「民衆」^{フォルク}と呼んでいる。これは人びとの間に實際に存在するが、しかしまだ団結や連合ではなく、まだより高次の有機体になっていない結合体である。生産および流通の過程を基礎にして人びとが再び民衆にまで結集し、「無數の器官と関節とをもつ有機体にまで合成する」度合にに応じて、今では個々の、原子化された人びとの精神と願望のうちにしか生きていない社会主義が現実となる。——それは国家の内部においてではなく

まさに絶対的なものとして用いられたり、現に可能な方策を貶したりするときは、それ自体障害となる。もし国家にして人が他の関係に入ることによってのみ実際に破壊される関係であるならば、人はまさに他の関係に入る度合において時々国家を破壊するのである。

この問題を十分に理解するためには、われわれはさらに一歩前進しなければならぬ。「国家」は（ランダウアーがのちのある時指摘したように）一つの状態である。一定の時期に一定の場所で生活を共にする人びとは、ただある程度までは自発的に相互に正しい生活を営み、自発的に正しい秩序を守り、自発的に共同の業務を処理することができる。この能力を時々に限定する線が国家のその時々基礎である。別の言葉でいえば自発的に正しい秩序をつくる時々の無能力が、正当的な強制の度合を決定する。しかし国家の事実上の範囲は、その時々その時に正当的な強制の度合から生ずる範囲を多かれ少かれ、多くの場合きわめて高度に踏み越えている。「原理上」の国家と事実上の国家とのこの時々の違いを私は過剰国家と呼んでいるが、この違いは、集積された権力は強要されない限り退かないという歴史的事実によって説明される。集積された権力は、自発的秩序への能力が増大して、それに十分強力な圧力を加えない間は、この能力の増大に適合することを拒否する。権力の原理的土台は腐朽するが、権力自体はそれを強制されない限り枯死しない。かくして死んだものが生きたものを支配することができ、「われわれは」とランダウアーは或時いっている、「われわれの精神にとって死んだものが、

「外部で、国家の外において」すなわち、まず国家の傍で行われる。この民衆への結集というのは、さきにも述べたように、新規なものの建設を意味するのではなく、古くから存在するもの、いかに埋もれ荒廃されていようと、事実上国家の傍に存在する共同体の現実化と新建設を意味する。「社会主義は、新規なものの案出ではなく、現に存在するもの、すでに成長しているものの発見であることを人はいつかは知るであらう。」それ故社会主義は、十分な数の人びとがそれを欲するならばあらゆる時代に実現可能である。実現される社会主義はもちろん技術的狀態にしたがって異なり、その開始や発展を異にするにしても、それが実現されるかされないかは技術的狀態に依存するのではない。それは人びとに、人びとの精神にかかっている。「社会主義はあらゆる時代に可能であり、またあらゆる時代に不可能である。社会主義はそれを欲する、すなわちそれを実行するに適した人びとが存在する時には可能である。人びとがそれを欲しないかあるいはただそれを欲すると称するだけで実行する力がない時には不可能である。」

国家と共同社会との関係に対するこの洞察から二、三の重要な事柄が明らかになる。實際上、「国家か非国家か」という抽象的な二者択一は問題でありえないことがわかる。二者択一の原理は、本質上個人および集団における真の決断にさいしては適切である。そこでは一切の中間的なもの一切の媒介的なものは、不純でありまた他を不純にする以上、それが及ぼす作用は混乱と曖昧と妨害とである。しかしこの原理は、それが決断の遂行にあたつての一定の各段階で

われわれの身体に生きた力を加えていることを見る。」この事情からして社会主義者たち、すなわち社会の構造的更新を念とする人びとにとって起る課題は、国家の事実上の基線を原理上の基線にまで押しもどすことである。しかしこれは、真の有機的な構造の形成と更新、人間個人および家族の様々な共同体^{グレイズ}への、また諸々の共同体の連合体への結合を通して生起することである。このような発展こそは、そしてこれのみが国家を排除することによって国家を「破壊する。」もちろんそれは、つねにその時々^{グレイズ}に無用な、根拠を失った国家の部分のみについてのことである。それを越えた行動は当を失し、失敗せざるをえないであろう。なぜならそれは、限度を越えるやいなや、その先の行動に要求される建設的精神を欠くからである。ここでわれわれはすでにブルードンが別の側面から看破し認識したのと同じ問題に逢着する。すなわち、十分なまた十分に活力のある共同精神を欠く結社は、国家に代えて社会を建設するものでなく、みずからのうちに国家を生み出し、その為すところも国家のそれ、すなわち官僚制によって運営される権力活動および拡張衝動と大して異なりえないという問題である。

だがランダウアーにとっては、上述のように、国家の「外に」、また国家の「傍で」社会を建設することは、本質的に「現に存在するもの、またすでに成長しているものの発見」であることも重要である。実際、国家と並んで共同社会が、すなわち「孤立した原子的個人の総和ではなく、様々の集団から一つのアーチへのように自己を拡大しようとしている有機的な共属性」

が存在している。しかしこの共同体的現実^{グレイズ}は眠りから目覚まされ、それが国家の殻の下に潜んでいる深みから呼び出されなければならない。このことは、人間の殻たる内心の国家化がうち破られ、その下で根源的現実の上にまどろんでいるものが目覚まされることによる以外には起りえない。「これが社会主義者の任務であり、また彼らによって呼び寄せられ、引き起される民衆運動の課題である。すなわち、硬化した心情をときほぐし、それによって埋もれていたものが再び表面に現われ出で、真に生きたものであるのにいまは全く死んだように見えるものが再び姿を現わし、もしくは成長するようにすることである。」このようにして更新した人びとこそ社会を更新することができる。そして彼らは、彼らの精神に新しいものとして知らされたのが、太古以来の共同社会的要素であることを体得したので、真の共同社会的形態を保ってきたすべてのものを新たな建設のうちに組み入れるであろう。ランダウアーは結婚の廃止を望んでいる婦人への手紙にこう書いている。「私たちにまだ残っている数少い結合^{フント}の形式を『廃止し』ようとするのは狂気の沙汰でしょう。私たちに必要なのは形式であって無形式ではありません。私たちには伝統が必要なのです。」気儘にまた無駄にではなく、正当にそして将来のために建設する者は、自分に委ねられ、自分を力づけるところの古い伝統と内的に相結合しながら行動する。このことから、ランダウアーが国家的関係に代って人間が入ることのできる「他の」関係を新しい名で示すのではなく民衆と呼ぶ理由が明かになる。この「民衆」はまた、国民と称せられ

るものの最も内面的な現実、したがって国家化や政治化が廃止されるときにもなお残るところのもの、すなわち本質的共同社会、多様性のなかでの存在の共同性を含んでいる。「この相似性、不同のなかでのこの平等、同じ民衆を結びつける特質、この共同の精神こそは確かな事実である。君たち、自由な人びとや社会主義者はこの事実を見のがしてはなるまい。社会主義、自由および正義はただ、古くから共属してきた人びとの間で達成されるはずである。また社会主義は抽象的に建設されるのではなく、人びとの間の調和に応じて具体的な多様さのうちに建設されるであろう。」ここに民族^{ナチオン}と社会主義との真の結合が見出される。生活様式、言語、伝統、共同運命の記憶における人々相互の親近は、共同社会の実存への永続的な素地であり、この共同社会の実存を建設することによってはじめて各民衆はみずから新たに建設することができる。「共同体精神^{ゲマインシャフト}による民衆の再生のみが救をもたらしことができる。」またランダウアーは共同体をも全く具体的に、たとえ痕跡だけでもせよ、姿を見せている古い共同体形態の伝統と、それらを維持し更新し発展させる可能性とにおいて考えている。「現在およびあらゆる時代に、根本的改革を欲する者は、現に存在するところのもの以外に改革すべき何ものをも見出さないのである。それ故、いま、またあらゆる時代に地域的共同体がその所有地をもち、その一部を共有地とし、他の部分を住居、屋敷、庭園および田畑として家族の財産とすることが適当であろう。」この場合ランダウアーは共同体の単位の深層記憶をも頼みにしている。「生きた

精神が外的形態をとって現われ、いまなお生きつづけている例は数多く存在するのである。古い共同所有の痕跡をもち、数百年来私有となったその初期の共同所有地について農民や農業労働者がなお記憶するところの村落共同体、畑仕事や手仕事のための共同の諸施設がそれである。「社会主義者であることは、時代のすべての共同精神および共同社会的生活と生きた関係を結び、非共同社会的な現代の奥底になお潜むそれらの痕跡を、目覚めた、とらわれない眼をもって探究し、またこれが可能なところではどこでも、新しい形態において企画したことを、強固な紐帯で永続的なものに結びつけることを意味する。だがそれはまた、一切の図式的な手段方策の追求をとらないように用心すること、人間および人間社会の生活では二点間の直線が最も長い線になるかも知れないことを知り、社会主義的現実への真の途は、たんに自分が知らないこと、知るべくもないこと、予期しないこと予期すべくもないことから生ずるかも知れないことを理解すること、そしていかなるときもできる限りその途を目ざして活動的に生活することを意味する。「われわれは」とランダウアーは一九〇七年にいった、「われわれの最短期の途について細かいことは何も知らない。その途はロシアを越え、またインドを越えて通じているのかも知れない。ただわれわれが知りうるのは、われわれの途は日々の進路と闘いを越えてではなく、未知のもの、深く埋もれたもの、突発的なものを越えて通じていることである。」かつてランダウアーは、彼が翻訳したことのある英雄的デモクラシーの詩人ワルト・ホイッ

トマンについて、多くの点で彼が精神的に結びついているブルードンと同様に、保守的精神と革命的精神、個人主義と社会主義とをひとつにしているといった。このことはまたランダウアー自身についてもいうことができる。彼が心に抱いているのは、結局革命的保守、すなわち保存する価値のある、また新たな建設に役立つ、社会的存在の諸要素を革命的に選択することである。

このような前提の下に、人はランダウアーを、南西ドイツのユダヤ系ブルジョア家族の出であったが、マルクスにくらべればはるかにプロレタリア階級に近く、またプロレタリアの生活に慣れていたこの人物を、革命家として理解することができよう。彼の社会主義的移住地^{ゲイトルンゲン}の提案は、絶えずマルクス主義者の側から、人間収奪の世界とこれにたいする仮借のない闘争から幸福な島に逃避して、これらの大きな出来事を拱手傍観するものであると非難された。これにもまして誤った非難はない。ランダウアーが考え計画したすべて、彼が語り書いたすべては、それがシェクスピアまたはドイツ神秘家を対象にしているときでも、またとりわけ建設しようとする社会主義的現実について計画したすべては、彼にとって、革命への大きな確信とそれへの大きな意志とに浸透されていた。「われわれは幸福のなかへ退避しようとするのか」と彼はある手紙に書いた（一九二二年）、「ではわれわれは自分のためにわれわれの生命が欲しいのか。われわれはむしろ民衆のために可能なことをしまた不可能なことをも要求しようと欲しないのか。」

か。われわれはすべてを、革命を欲しないのか。」しかし彼が革命と呼ぶ長期にわたる解放闘争は、「革命ではなくして再生を意味する精神がわれわれをとらえる」とき、初めてその成果を結ぶことができる。この長期の革命のなかでの個々の革命をランダウアーは精神の火熱浴とみ、かくしてまさに革命はその究極の意味では再生そのものとなる。「この攻撃運動の火と熱狂と友愛のうちに」と彼は一九〇七年私の求めて著わした書物『革命』に書いている、「人々を結び合せる特性、すなわち同時に力でもある愛を通しての積極的な結合の観念と感情とが目覚める。そしてこの当座の再生なしにはわれわれは生きつづけることができないし、破壊せざるをえないであろう。」だが感うことなくこう認めることが肝要である。すなわち「ユートピアは、もちろんそれが語ることよりも語る仕方において極度に美しいものであるけれども、革命が達成するところのもの、まさしくその終局は、前から存在したものと大してちがわないのである」と。革命の力は反乱と否定のうちにあり、革命はその政治的手段をもってしては社会問題を解決することはできない。しかし「革命が」とランダウアーはフランス革命について語りながらつづける、「フランス革命の如く内外いたるところで敵にかこまれた恐るべき状態に全く陥るときは、なお生きている否定と破壊の力は内に向い、己れに打ちかからざるをえない。狂信と激情は不信に変わり、やがて殺戮、もしくは少くともつのりゆく死の恐怖への無関心となり、そしてやがて死の恐怖がその時の権力掌握者にとってその暫定的地位を保持するための唯一の可

能な手段となる。」かくして(ランダウアーは十年後にも同じフランス革命についての同様の認識から書いた)「革命の最も熱烈な代表者たちは、彼らの最も純潔な時期には、彼らが荒れ狂う波のためにしまいはどのような岸に打ちあげられたにもせよ、人類を再生に導くものと信じまたそれを欲していた。しかし人類の再生にはいたらなかったし、また彼らは同時に互いにそれを邪魔し合い、革命が戦争、暴行、命令組織および強権的抑圧、政治と結びついたという理由で互いに罪をなすり合うことになった。」これら二つの言明の間の第一次世界大戦を眼の前にした一九一四年七月、ランダウアーは同様の批判的洞察をとくに時論的な形で表明した。「われわれは」と彼は書いた、「今日すべての国々の情勢からして、革命の誘発は、よし成果を見るときにも、結局は帝国主義という国家資本主義的権力の伸張に役立つにすぎないことをななら疑ってはならない。また革命の誘発は、たとえ初めは社会主義的な色彩を帯びていようとも、ナポレオン、カヴール(イタリア統一の政治家)もしくはビスマルクの如き人たちによって政治の流れに容易に導きこまれることにも疑問の余地がない。なぜなら、こうしたすべての反乱は実際には、たんに政治革命もしくは国民戦争の手段であって、社会主義的激変の手段では全くありえないからであり、社会主義者たちが実際はロマン主義者として敵の手段に奉仕し、新しい民衆と新しい人類とを実現すべき手段を用いていないしまた用いることを知らないからである。」しかも一九〇七年すでにランダウアーは、ブルードンに立脚して、上の認識から次の結論を引き

出した。「やがて人びとは」と彼は書いた、「すべての社会主義者のなかで最も偉大な社会主義者のブルードンが、よし今日忘れさられているにせよ、無比な言葉で明言したこと、すなわち社会革命は政治革命となんら類似するところがないこと、社会革命は多種多様の政治革命なしには活発にならないし、また持続もできないが、しかしそれは平和的建設であり、新しい精神からの、また新しい精神への組織化であって、それ以外の何ものでもないことを、今よりもはっきりと知る時が来るであろう。」そしてさらににつづけて、「だが事実としては、ゴットフリード・ケラー(スイスの詩人、小説家、一八二〇—一九〇〇年)がいったように、自由の最後の勝利は無味乾燥なものである。政治革命は、文字通りにまたあらゆる点にわたって地ならしをするであろう。しかしそれと同時に、国家の背後に閉じこめられた精神を解放すべき経済的諸結社の連合(ゾグ)が生きていることができるような諸制度を準備するであろう。」しかしこの準備、すなわち真の「社会変革は愛と労働と平静のうち

ばならなかった。「物事にはすべて時期がある。その生活が過去の偉大な時期のうちに停滞してはいないすべての人々にとっては、革命後の一刻一刻が革命前の一刻一刻なのである。」プルードンは数々の傷口から血を流しながらも生きつづけた。今や彼はこう自問した。諸君がそれをやるなら、と自分はいったが、何故に彼らはやらなかったのか。彼はその答を見出し、その後のすべての著作にそれを書きとめたが、それはわれわれの言葉でいえば、「精神が欠けていたからである。」

またわれわれは、クロボトキンにたいする一つの本質的な事柄を明かにした点でもランダウアーに負うている。政治革命が社会革命に役立つためには三つのことが必要である。第一に、革命家たちは土地を解放して手持ちの共同財産となし、ついでその共同財産の上に諸社会の連合体を完成することを固く欲しなければならぬ。第二に、共同財産は、土地解放ののちそうした完成がなされるように制度として準備されなければならない。第三はこの準備は真の共同体精神において行われなければならない。

従前の社会主義者のうちの何人も、この第三の「精神」が新しい社会的生成にたいしてもつ意義を、ランダウアーほど深く認識しなかった。人びとは彼がそれでいおうとしていることをただ体得しなければならぬ。——これはもちろん、精神の実在を物質的実在の所産および反映として、経済・技術的關係において捉えられる「存在」によって規定される単なる「意識」

として理解しうるなどと信じることなく、かえって精神的実在のうちに、社会的存在と密接な相互作用の關係にありながらも、そのためにいかなる点においてもこの社会的存在によって十分には説明されない独自の種類の存在を認めるという前提の下においてのことである。

「より偉大な文化の段階に到達するのは」とランダウアーはいう、「独自の存在し相互に独立する様々の社会的構成体が、それら構成体のうちに存在するのではなく、またそれから生起するのでもなく、むしろ独立したものとしてまた何か自明的なもののようにそれらの構成体を支持するところの統一的精神によってことごとく満たされている場所においてである。いかえれば、より偉大な文化の段階が実現するのは、多様な組織形態および超個人的構成体を統一するものが、権力の外部的紐帯ではなく、個々人のうちに存在し、世俗的・物質的利益の彼方を指向するところの精神であるような場所においてである。」その実例としてランダウアーはキリスト教中世（実際に西ヨーロッパの歴史において、この点で東洋の偉大な文化にくらべられる唯一の時代）をあげる。彼はキリスト教中世が、封建制度、教会および修道院、騎士団によって代表されるとは見えないように、あれこれの共同体的生活形態すなわち農村のマルク共同体、ギルド、ツンフト、および身分制同胞組合、都市同盟などによっても代表されるとは見ず、むしろそれは相互に浸透して、「諸社会の社会をなしている独立的な諸単位の全体」によってはじめて特徴づけられるものと見る。様々に分化した諸形態をすべて結合し、「いわば頂

点からより高い統一を目ざして結集し、その尖端は支配をなすのではなくて虚空に姿を消しているようなピラミッドを形成していたものは、個人個人の性格および精神からこれらすべての構成体のうちに流れこんでおり、またそれらによって一層強められて再び人びとのうちに流れ戻っているところの精神であった。」人はこの共同精神を今日の如き時代、すなわち、「精神の喪失およびそれと共に暴力の時代、精神の喪失およびその故に個々人の精神の強度な緊張の時代、個人主義およびその故に原子化と根を引きぬかれて塵と化した大衆との時代、精神を欠きまたその故に真理を欠く時代」に、呼び起すことができるであらうか。現代は「頽廢の時代」であり、またその故に過渡的時代である。現代がそうであるが故に、現代、まさしく現代においてこそこの精神の出現が切願されるのである。かくの如き切願こそは革命である。しかし精神にその場所をしつらえるのは現実である。「マルク共同体やかくも多くの階層のおよび盟約的諸制度が、精神に先立ってすでに存在しており、精神は後からそれらを満たし、かくして初めてそれらをキリスト教時代が意味するところのものたらしめたように、また足が発達する前に歩くことがすでに行われ、この歩行が足をつくり発達させるのと同様に、われわれを遂に就かせるものは精神ではなく、われわれの歩む途がわれわれのうちに精神を生みだすのである。しかしこの途は、「いまの生活をつづけることは内心不可能であることを悟った人びとが、相団結し、労働を彼らの必要に役立たしめること、すなわち、あらゆる困苦欠乏の下にありなが

らも移住地や協同組合を建設すること」に通じている。これらの人々のうちに活動する精神は、彼らをその共通の途にせきたてる。そしてこの途において、この途においてのみ、精神は新しい共同精神となることができる。「われわれ社会主義者は、その精神が結合的精神として人々を彼らの共同生活に導くため、それに自然性と現実性とを与えようと欲する。われわれ社会主義者は、精神を感性的身体的なものとし、精神を活動させることを欲し、またまさにそうすることによって感性とこの世の生活を精神的なものとなすであらう。」しかしそれが行われるためには、精神の焰が消えないように、移住地においてそれを注意深く見守らなければならない。生きた精神によってのみ移住地は実現され、それなくしては幻影でしかない。しかし精神がそこに生きているならば、精神はそこから世界に吹きわたり、精神なくしては空の容器、目標のない目的制度でしかないすべての協力および結合の機関に浸透することができる。「われわれは、精神のない社会主義的形態である協同組合や、目標のない勇氣である労働組合を社会主義に、偉大な企図に持って行こうと欲する。」社会主義とは、とランダウアーはいつている（一九一五年）、「人々の共同生活を共同精神にもとづく自由な結合に、すなわち宗教に持って行こうとする企図」である。これはおそらく、現代のあらゆる宗教的象徴や宗教的信条をたえず拒否したランダウアーが、「宗教」という言葉を積極的なまた結合的な意味で語った唯一の個所であらう。——それは、彼が熱望するもの、すなわち共同精神にもとづく自由な結合を表現する

ものとして用いられている。

そうした結合は、期待さるべきではなくして「企図」さるべきであり、同時に開始さるべきである。共同精神を志向するランダウアーは、共同精神にとってこの大地以外にかなる場所も存在しないこと、すなわち、土地が再び人びとの共同社会的な生活および労働の支担者となる度合においてのみ、共同精神のための場所が存在することを知っている。「社会主義の闘いは土地のための闘いである。」しかし「土地所有関係に大きな変革が到来するためには」と——ランダウアーによって創立された社会主義同盟規約十二個条はいつている——「労働者はまず社会主義的資本であるところの共同精神の確立を基にして、時々彼らの数と精力に応じてできるだけ多くの社会主義的現実を形成し、その模範を示さなければならぬ⁽⁸⁾。」これによってこそ開始ができるのである。「何ものも、結合した消費者たちがその相互的信頼によって彼ら自身のために働き、自ら工場、仕事場、住宅を建設し、土地を獲得するのを妨げることはできない。彼らがただ欲し開始しさえすれば、何ものも。」これが、ランダウアーの念頭にある、新しい社会の「基礎形態」としての共同体^{ゲマインシャフト}の像、社会主義的村落の像である。ランダウアーはクロポトキンの考えを受けついでいつている（一九〇九年）、「仕事場および農村工場、草地、耕地および庭園、家畜および家禽をもつ社会主義的村落。——大都市のプロレタリア諸君よ、初めは縁遠い奇異なもののように思われるかも知れないが、これこそは現実的社会主義に残された

唯一の開始であるという考えに慣れるがよい。」革命が、場所と勢力とを闘いとしてやらなければならぬ何かを見出すかいは、本質的に、この一見全く取るにもたらぬように見えることに、それが起っているかいかにかかっている。——そして革命の時期自体はそれをつくり出すことはできないであろう。だが革命の焔に政治的収獲以外に社会主義の果実が熟するかいなかは、本質的に、革命がその何かを見出し、それに十分な成長を確保するかどうかにかかっている。

したがって人びとが今ここで、資本主義の支配の下で、労苦、困難、失望にもかかわらず、生産および消費の共同化を基にして生活を共にし、生活を共同化することによって成就するところのもの以外にかなる創始も、未来を生むいかなる核も存在しないとしても、ランダウアーはそのようにして成立せしめたものを究極的な実現形態と見なすことからは遠くはなれていない。ブルードンおよびクロポトキンと同じ様に、彼もまた、今日の人びとが夢想し、認知し、工夫し、計画するものの上に、社会主義的渴望を固定することなど考えない。ランダウアーは、「この少数の人びとの已みがたい社会主義の創始、すなわちジードルングが、原始経済の辛い困難な共産主義と多くの点で類似する」ことをよく知っている。しかし彼にとって「主要な事柄」は、「われわれが、この共産主義に似た状態を理想としてではなく、創始者であるが故に、社会主義のために一つの必要として、その最初の段階として受けいれること」である。そこから

「できるだけ速かに」、ランダウアーがただ一般的な輪郭で描いたその像のうちにブルードンとクロボトキンとの思想を融合したところの社会すなわち「コミュニオン、農業と工業を結合する地域的共同体を基礎とする平等な交換の社会」への途が通ずるべきである。しかしそこにランダウアーは決して絶対的な目標を認めず、ただ「われわれが、将来に眼を注ぐ限りにおいて」最初に追求しようとするものを認めるにすぎない。真の社会主義はすべて相対的である。「共產主義は絶対者を目があるが、もちろんそれには言葉の上の創始以外のいかなる創始をも見出しえない。なぜなら、一切の現実から引き離された絶対的なものは、言葉だけだからである。」

社会主義は決して絶対的なものではない。社会主義とは、時々与えられた条件の下で、その時々意欲され実行されるところのものの度合と形態とに応じて、人類のうちにその時々人間の共同社会が生成されることである。固定化はすべての実現を脅かすものである。今日澁滞と生きているものも明日は穀を生じ、余りに強くなりすぎてその先に起る緊急な物事を抑圧するかも知れない。「文化と自由とが相結合して存在すべきところではどこでも、秩序の様々な結合が互いに補い合わなければならないし、また一定の束縛は自らのうちに解放の原理を含んでいなければならない。……真の文化の時代には、例えば私的所有の秩序は革命的、解放的および新たに秩序づける原理としてセイサチティア⁽⁹⁾もしくはヨベル⁽¹⁰⁾の年の制度のうちに含まれているのである。」真の社会主義は更新の力を守り育てる。「千年王国もしくは永遠の

ための究極的な保証策などを確立しようと思うべきではなく、むしろ確立されなければならないのは、大きなかつ包括的な均衡とこの均衡を定期的に更新しようとする意志とである。……『さあ国中にラッパを吹きならせ！』精神の声こそはラッパである。……戒律としての反乱、最終的に備えた規準としての改造と変革、意図としての精神をおしての秩序、これが、このモーセ的社会秩序における偉大にしてかつ神聖な事柄であった。われわれは再びそれを必要とする。すなわち物事や制度を究極的なものとして確立するのではなく、むしろ自らを恒久的なものとして明示するであらう。ところの精神による新たな規制と変革とを必要とする。革命はわれわれの社会秩序の附随物となり、われわれの戒律の基礎とならなければならない。」